

歌道秘藏錄の刊本

龜田次郎

一

てにをは研究として、國語學史上重要な地位を占めてゐる「姉小路式」は、寫本の儘に傳はつてゐて、未だ刊
ないのであるが、其類書の中には、間々、刊行されてゐるのがある。此事に關しては、自分は已に數年前に發
のである。（姉小路式の類書及其刊本について。書物の趣味第五冊昭和四年十二月刊所載參看）其當時、自分は此類書の
「歌道秘藏錄」の刊本丈が未だ獲得出来ない旨を述べて置いたが、幸にも、其後、自分は其刊本を獲たから、今
本篇を草して、世に紹介する次第である。斯學の爲に參考とならば幸の至である。

二

「歌道秘藏錄」の刊本については、已に「國語學書目解題」八四頁に、

歌道秘藏錄の刊本

寛文十三年刊、京、谷岡右衛門（○本ノマ、）發行

と見えて居るが、此刊本は、現在では稀觀本に屬して居るのである。自分の調査した範圍では、全國有名な各地の圖書館や文庫の書目に見えて居ないのである。世上に存在するものは寫本である。寫本は、屢、見受けるのである。近頃出版された福井久藏氏の「増日本文法史」にも、本書の挿畫が載つてゐるが、これも矢張寫本であつて、刊本では無い。刊本は極めて稀な様である。自分は今より三十五年以前、東京大學在學中の明治三十四年春、同大學國語研究室で、今の新村博士が刊本と寫本との校合をせられてゐた時、刊本を一覽したのみである。其後、十年を経て、明治四十三年夏、自分が入浴した際、故富岡謙藏氏が所藏されてゐる時を又今の吉澤博士から耳にしたが、これは所藏者物故のため遂に見ることが出来なかつたし、吉澤君も亦見ずに仕舞はれた様である。此等の事情は、前記の「書物の趣味」所載の拙稿中に述べてあるから參看せられたい。自分は、爾後、此「歌道秘藏錄」の刊本を搜索し、其獲得を望んでゐたが、其願が叶つて、昨八年七月五日、京都其中堂書店から購求して、多年の宿望を充したのである。それで今、自分は、此刊本を紹介して、聊同好の人士に示し、其研究の一助とせんとするのである。



此稀觀刊本「歌道秘藏錄」は、美濃紙一冊本であるが、少し型が小さい。縦八寸六分五厘、横六寸である。題簽は削落して存し無いが、「歌道秘藏錄全」と重書してある。全編二十一



丁、半葉八行、毎行凡二十五六字詰、行書平假名の印刷である。巻末にはまた行書で、

寛文十三癸丑年初夏吉辰下御靈前谷岡七左衛門板行

と刊記がある。此出版元は、「慶長以來書買集覽」に、谷岡七左

衛門明曆—寛文京都下御靈前(寺町通丸太町下ル)とある書肆である。其内容を、自分が從來、屢、閲覽した世上流布の寫本のものと、比較對照するに、大同小異であるから、今くだ

くしく一々それを述べない。只本書の寫本の中には、往々、巻末に問答體で註解を加へたのがあるが、刊本には、

此問答體の解釋は、全く存してゐないのである。自分の口撃したものは、此問答體の解釋のあるのは、其年代が比

較的新しい様であるから、後年、誰かゞこれを添附したものではなからうかと考へるのである。此刊本をば、自分の

(○本ノヤ、)

所藏寫本の中で、最年代の古い「寛十六年初秋」と奥書ある寫本と對照するに、三四箇所文句の小異と、刊本巻末に見える元和八年八月の烏丸光廣卿の奥書の無いとの差異丈である。尤も此奥書は、大抵の寫本には存してゐるのであるから、寛永十六年本に奥書の無いのは、或は、故意にこれを省略したのかも知れ無い。寧ろ、奥書の存在するのが原形であつたのであらうとおもはれる。此奥書の無いのは、他にも存在してゐるのである。自分の管見では、此刊本は、刊行當時廣く世に行はれてゐたものを採用して、出版したものであらうと考へるのである。

此刊本は、「國語學書目解題」所載の刊本と、全く同じものである。然るに「歌道祕藏錄」の刊本には、尙下の如きも

のがある。それは、富士谷成章の「脚結抄」の古板本卷末に附けてある「水玉堂藏板和歌連俳書目」京都寺町五條上ル町
天王寺屋市郎兵衛の

中に、

歌てには祕藏錄鳥丸光廣卿
道てには注したる書なり

と記してあるから、矢張同じ京都で水玉堂天王寺屋市郎兵衛からも刊行した様である。此水玉堂は、「慶長
以來書買集覽」
に、

天王寺屋市郎兵衛葛西氏水玉堂元祿—慶應
京都寺町通五條上ル西側

とある書肆で、「脚結抄」の板元である、脚結抄は、安永七年三月刊行であるから、安永七年以前の出版と認められる。然るに、前掲谷岡七左衛門刊行本の表題と、此水玉堂天王寺屋(葛西)市郎兵衛出版の書名と聊異つてゐるから、或は、別刊本かも知れぬ。而も前掲慶長
以來書買集覽に依ると、谷岡、天王寺屋兩書肆營業の時代も、少し懸隔がある様である。それで或は、彼の谷岡本を、此天王寺屋から、更に、後年、板行して其表題を變へたのかも知れぬ。徳川時代には斯る例はいくちもある。現今でも亦然りである。何れにしても、此水玉堂本は、今尙未見であるから斷定に苦しむのであるが、其出版のあつた事は、前掲の「書目」に依つても確實である。何れにしても、此「歌道祕藏錄」の刊行は時代から見ても、谷岡本が初刊で、天王寺屋本は後刻本であるのは明かである。自分は、今、茲に、只、其初刊本たる谷岡本丈を示するに止まるのである。それで自分の述べた處は、此「歌道祕藏錄」の刊本、而も其初刊本について、其要を示したに過ぎぬ。其詳細な内容の他書との異同比較や、又其批判は、國語學史上の問題であるから、其は後日を期する事とした。自分は此稀觀刊本の存在を世に紹介したならば、吾が望は足るのである。

終に臨んで、序に茲にいつておくべき事がある。それはてにをは研究史上、本居、富士谷兩大人の其研究學說全く無關係で、殆んど時を同じうして、東西に現はれ、而も此兩人は生前全く面識交際がなかつたことは、本居「玉勝間」卷八（藤谷成章といひし人の事の條參看）にも見えてゐるのであるが、此全く無關係無交渉の兩人の學說の淵源は、第三者姉小路式や其系統の類書に存するといふ事は、上田萬年博士や、保科孝一教授に依つて夙に唱道された所である。爾波研究に於ける富士谷本居兩家の關係に就て。——上田萬年、言語學雜誌第一卷第七號 明治三十三年八月刊。及脚結抄の玉緒とにつきて。——保科孝一、國學院雜誌第八卷第一號。明治三十五年一月刊。所載參看。）今自分は、「姉小路式」の系統でも其一類書たる此「歌道祕藏錄」が、富士谷成章の「脚結抄」の板元、水玉堂、天王寺屋市郎兵衛から後刷本さへ出れた點から察して、此兩大人殊に富士谷大人の研究學說の淵源に、影響寄與した所があり、又、其間に何かの重存在してゐるのでは無いかとおもふのである。此問題に關して、自分は其所見發表を他日に譲る事としたのである。世の學徒にも、亦、更に其等の討究を望むのである。

三

以上縷述した所に依て、今日稀觀本となつてゐる「歌道祕藏錄」刊本の大略は、わかつたであらうとおもふ。而も書の刊行は、只、單に其公刊を行つたに止まらずして、他に何等からの意味や事情が存在するのでは無からうへられるのである。今、自分が本籍を公にした所以は、一は現在此稀觀本の儼存を示すと共に、他に或未知事存在をも闡明したいがためでもある。而も其討究を、更に、同好の人士にも切望する次第である。此蕪雜の短篇云一此方面研究の促成に資する所あらば幸である。（昭和九年九月三十日夜稿）。